2　新潟市西蒲区角田山沖発見の縄文土器

新潟市西蒲区角田山沖海中から引き揚げられた縄文土器１点について資料紹介を行う。

この縄文土器は、平成25年10月６日に、新潟市西蒲区角田山沖15kmの水深150～170mの海底から、底引き網漁の際に引き揚げられた。現在、この土器は、発見者から新潟市文化財センターに寄贈され、同センターで一般公開されている。

遺存状態は比較的良好で、口縁部以外は完全な形を保っている。口縁部はかなり欠損しているが、原形をうかがうことは可能である。法量は、器高36.5cm、口径26cm、底径10cmである。器種は深鉢で、器形は底部から胴部そして口縁部へと外傾気味に直線的に立ち上がる。口縁部は４単位の波状口縁と考えられ、波高は1.5cmである。文様は、口縁部は無文帯で、胴部は全面にLRの縄文が施され、上半は口縁部との境に４条１組の横位沈線文がめぐり、その下方には同様の平行沈線で描かれた横位波状文１条と横位沈線文が２条めぐっている。沈線文は、半截竹管で４条の平行沈線を下書きし、その後に棒状工具で沈線部分をなぞって描出している。そのために、沈線間は半隆起線状を呈する。色調は、内外面共にぶい黄色を基調とするが、外面の一部は明赤褐色である。また、外面一部に黒斑と思われる痕跡が認められる。胎土は長石や海綿骨針を若干含み、大小の赤色粒や白色粒を主体とした砂粒が多く見られる。成形は、内外面共に丁寧で、滑らかである。土器の内外面には、長く海中にあったことを証明するかのように、貝の付着痕が多く認められる。

出自は、前述した特徴から、東北地方南部の大木式、あるいはその系統を引く土器と考えられ、長岡市馬高遺跡に類似する土器を見出すことができる。それゆえこの土器は、大木式の外核圏である信濃川中流域の土器にその出自を求めることができそうである。編年は、器形や波状文を有すること並びに沈線の施文手法などから、中期中葉の馬高式の後半に比定でき、大木８ａ式の終わりから大木８ｂ式の前半に並行するであろう。

この土器は、陸地から遠く離れた海中から引き揚げられたということに特筆すべき点があり、5,000年余り前の縄文時代中期における日本海海上交通の活発な実態を示す具体的な証拠として重要である。新潟県域で縄文土器が海揚がりした例は、今から30数年前の佐渡海峡例に次いで２例目である〔小熊1998〕。このように、陸地から遠く離れた海中深くより完全な形に近い縄文土器が引き揚げられたことは、この２例を除けば聞いたことがない。

（寺﨑裕助）

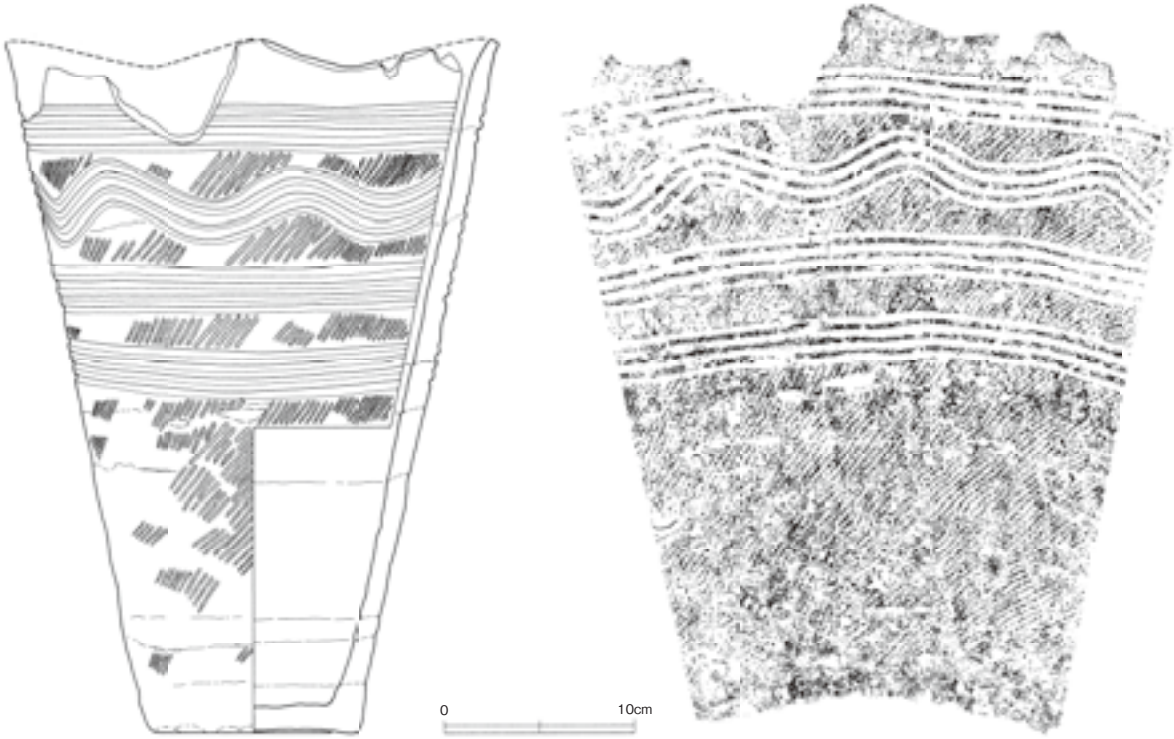

図２　縄文土器実測図（１/４）